

# どうして「犬」は名詞なの？：

## 統語範疇の判別理論

山下佳江

### 1. 背 景

The poverty of stimulus argument (刺激不足理論) は言語獲得の分野において長く研究されているテーマである。言語システムについてどの程度の知識が生まれつき備わっているかについては研究者によって意見が別れるが、獲得過程でのインプットの質と量と、獲得される文法システムとの間に大きなギャップがあることに異論を唱える研究者はいないであろう (O'Grady 1995)。生得論者は、そういったギャップを埋める情報はすべて生まれつき備わっているとし、たとえば、目的語は主語より動詞に近い位置にあることや、単語の組み合わせは三語ではなく二語が一度に行われること、といったことを子どもは生まれながらにして知っていると主張している (O'Grady 1995)。

しかし、この生得的見地については問題がある。つまり、たとえ主語や目的語といった概念が生まれつき備わっていたとしても、子どもは、たとえば「犬」、「猫」といった単語が名詞であり、動詞ではないということを無意識のうちに知っている必要がある。「追い掛ける」、「来る」、「走る」といった単語が動詞であり、名詞ではないことを子どもはどのようにして知りうるのか？この問題は今までに何人かの研究者によって指摘されている (Pinker 1984; O'Grady 1995他)。

Grimshaw (1981) や Macnamara (1982) の説にしたがって、Pinker (1984) は、この問題に対して一つの理論を唱えた。つまり、The semantic bootstrapping hypothesis (意味的自助仮説) である。この理論は、単語の意味的特性と統語的範疇の間には普遍的な一対一の対応があり、しかもこの対応は子どもの生得知識の一部であるというものである (Pinker 1984: 39)。たとえば、人々の名前やものの名前は名詞であり、動作や変化は動詞といった具合である。表1はその一部を示す。

表1 単語の〔統語的範疇と意味的特性の一対一対応〕の一部

統語的範疇	意味的特性
名詞	人の名前, ものの名前
動詞	動作, 変化
形容詞	属性
前置詞	空間関係, 進路, 方向

仮に、この単語の意味的特性と統語的範疇の間にある普遍的な一対一の対応も生得的なものであるなら、単語のカテゴリー判別もその意味のある状況から判断できるであろう (Pinker 1984: 40)。しかし、この仮説が成り立つためには、インプットの情報がこのセットと一致したものでなければならない。さもなければ子どもは適格な範疇判別ができなくなってしまう。この条件はPinkerの理論の重要な根幹として満たされなければならない。Pinker (1984: 61-2) は、実際この条件は満たされていること、つまりインプットの多くの場合このセットと同じような現象となっていることを証明する。同じような結果はRondal & Cession (1990) の研究からも報告された。Pinker (1984: 57) も他の研究者が集めた幼児の早期習得データ (Brown 1973, Slobin 1973) から意味的特性と統語的範疇の一対一対応の結果を得た。もし子どもの早期発話においてもインプットにおいても同じ意味的特性と統語

的範疇の一対一対応が見られれば、子どもがこのシステムを範疇判別のための基本的な自助機能として使用していることを意味する、というのが Pinker の理論である (Pinker 1984: 56-9)。

日本語には「動名詞」と言われる、動詞の特性を持ち合わせた名詞のカテゴリーがあることはよく知られている。Martin (1973) によると、動名詞は助動詞 (auxiliary verb, あるいは light verb = 軽動詞)「する」を伴って複合動詞を形成する。「犬」といった普通名詞と異なり、動名詞は語幹的役割 (thematic roles) を含む。ちょうど自動詞のように自動名詞は一つの語幹的役割を有する。次の自動名詞の例では、語幹的役割は、動作主で、〈Agent〉として示されている。

- |            |            |
|------------|------------|
| (1) 自動名詞   | 例          |
| 散歩 〈Agent〉 | お父さんが 散歩する |

同じように、ちょうど他動詞のように、他動名詞は二つかそれ以上の語幹的役割を含む。以下の例はこの点を示している。

- |                   |                                   |
|-------------------|-----------------------------------|
| (2) 他動名詞          | 例                                 |
| 勉強 〈Agent, Theme〉 | まさおが 英語を 勉強する。<br>〈Agent〉 〈Theme〉 |

Martin (1973: 869) はさらに特別な名詞化過程によって助動詞「する」が落ちて、動名詞の項は所有格の「の」を伴って修飾部となる。したがって、(1)と(2)は以下の(3)と(4)のようにそれぞれ名詞化される。

- |             |    |
|-------------|----|
| (3) [お父さんの] | 散歩 |
| 〈Agent〉     |    |

- (4) [まさおの 英語の] 勉強  
 〈Agent〉 〈Theme〉

これらの例からわかるように、(1)や(2)のように複合動詞として使われようと、(3)や(4)のように名詞化して使われようと、動名詞はある特定の項を含む。

このような日本語の動名詞は、意味的屬性が名詞の典型的な屬性、つまり人の名前やものの名前と一致しないため、範疇判別を行う子どもたちにとって問題となるであろう。これらの動名詞は、動作や変化といったむしろ動詞的意味をさす。Pinker が唱える [統語的範疇と意味的特性の一対一対応] (表1参照) は普遍的なものであるとするので、動名詞の存在にかかわらず、英語の習得データと同じように、日本語の習得データにおいてもインプットデータの中にその証拠となる一致が存在しなくてはならない。

この論文はこのあと次のような内容となる。第二節では、Pinker の理論と彼がその理論を擁護するために調べた間接的証拠、第三節では、日本語の動名詞の一般的な特徴とその由来、第四節では、日本語を学んでいる幼児の発話データをもとに [意味的特性と統語的範疇の一対一対応] についてインプットと幼児の発話したことを調べ、第五節では英語の習得データとは異なる結果をもとに Pinker の理論を検証する。第六節は結びのこたばを含む。

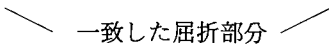
## 2. 意味的自助仮説とその間接的証拠

### 2.1 意味的自助仮説

Pinker (1984) の意味的自助仮説は二つの部分から成り立っている。一つは、semantic bootstrapping (意味的自助部分) で、もう一つは distributional learning (分布による学習) である。意味的自助とは、とりあえず最初の段階では子どもが単語の意味的屬性をもとに単語の範疇を判別するものである (Pinker 1984: 39-40)。第一節の表1に示したように、人間

のことばには[統語的範疇と意味的特性の対一対応]のシステムが存在し、それは子どもに生まれつき備わっている、とする。このシステムを利用することによって、子どもはインプットの中にあることばの統語的範疇を最初に判別する。たとえば、「dog 犬」、「cat ねこ」といった単語はものの名前を指すので、名詞として判別される。一方、「chase 追い掛ける」、「come 来る」といった単語は動作を指すので、動詞として判別される。

この理論の二つ目の根幹は、分布による学習である。これは主に意味的自助部分で扱えなかったものに対して行われる (Pinker 1984: 40)。単語のほとんどは第一の部分で判別できるが、やはりかなりの単語はまだ意味的自助部分だけでは判別されずに残る。たとえば、「consist 成り立つ」、「policy 政策」といった単語の意味的特性は、[統語的範疇と意味的特性の対一対応]のシステムの中には見当たらない。これらの判別不可能な単語は、すでに意味的自助部分で分類された単語の屈折部分が一致するかどうかによって判別される。したがって、たとえば、過去形-edが学習され、「kick 蹴る」という単語がその意味から動詞と判別されたら、「consist 成り立つ」といった意味的要素が曖昧な単語は、過去形という屈折部分の一致によって動詞として判別される。(5)にこのような判別過程を示す。

(5)	〈意味的特性が明確〉	〈意味的特性が不明確〉
意味的自助機能	kick = 動作	consist = ?
	動作 = 動詞	? = ?
	∴ kick ⇒ 動詞	∴ consist = ?
分布による学習	kick : kick-ed <past>	consist : consist-ed <past>
	 一致した屈折部分	
	∴ consist ⇒ 動詞	

したがって、意味的自助仮説は、統語的範疇を判別する際、子どもが意味

的自助機能と分布による学習のコンビネーションという方法を用いるとする理論である (Pinker 1984: 42)。しかし、Pinker が言っているように、この理論は、確かに意味的自助部分が範疇判別の基本であることにまちがいはないが、意味的特性をもとにした判別が絶対的なもので、屈折部分の分布による情報を圧倒することはない (Pinker 1984: 42-3)。

## 2.2 間接的証拠

Pinker の理論について間接的証拠をひきだせる二つの領域がある。一つは、子どもに話しかける親の発話である (Pinker 1984: 52)。子どもは耳から入ることばを聞いて単語の統語的範疇を判別するのであるから、インプットはPinker が提唱する〔統語的範疇と意味的特性の一対一対応〕の内容と一致していなくてはならない。Pinker は具体的にどの程度一致するべきかということについて触れていないが、判別が意味的自助部分をもとに行われるとするならば、少なくとも50%以上の割合での一致が必要であろう。Pinker は、Brown のデータ (1973) を調べ、インプットにこれらの〔統語的範疇と意味的特性の一対一対応〕がかなりの割合で見られたことを発見した。以下にその結果をまとめる。

表2は、それぞれの対応には高い割合での一致を示し、全体としてインプットの持つ情報と〔統語的範疇と意味的特性の一対一対応〕システムとの

表2 インプットにおける〔統語的範疇と意味的特性の一対一対応〕の割合  
Pinker (1984 : 62)

〔統語的範疇と意味的特性の一対一対応〕	割合 (%)
動詞によって表された動作	88
名詞によって表されたものの名前	100
形容詞によって表された属性	100
前置詞によって表された空間関係, 進路, 方向	100

間に一致関係が見られた。この結果は、名詞が100%もの名前を指すとか、動詞が88%動作を指すという意味ではなく、この点を注意しなくてはならないことをここに記しておく。

二つ目のPinkerの理論の間接的証拠が見つかる可能性のある領域は、子どもの初期段階での発話である(Pinker 1984: 52)。Pinker (Pinker 1984: 56-7)によると、もし子どもが本当に「統語的範疇と意味的特性の一対一対応」を単語の範疇判別に使用しているとしたら、子どもの初期段階での発話の内容は、このシステムの内容と一致したものであるはずである。Pinkerは、自分の理論を擁護する証拠として、Brown (1973)をはじめとする他の研究者の発話データから、子どもの最初の名詞群は100%の割合でもの名前を、最初の動詞群は動作を、最初の形容詞群は属性をそれぞれ指したものであったことを報告している。

インプットにおいても、また子どもの初期段階の発話においても、「統語的範疇と意味的特性の一対一対応」が高い割合で存在することは、この理論にとって重要である。というのも、この一致の存在なしには、この理論は成立し得ないからである。これらの結果については、第5節で本研究の結果との比較される。

### 3. 日本語動名詞

#### 3.1 一般的な特徴

第一節で、日本語動名詞が助詞の「する」と結合して複合動詞を形成することを示した。たとえば、動名詞「勉強」は、「勉強+する」では複合動詞となる((1), (2)参照)。また、特殊な名詞化の過程では、助詞の「する」が落ち、すべての項が所有格の「の」と結合して修飾部となる((3), (4)参照)。

さらに、動名詞は、複合動詞の一部である「する」の目的語として扱われ、他の目的語がない場合、目的格の「を」によってマーキングされる(Mar-

tin 1973: 869)。この場合、動名詞は名詞、「する」は助詞ではなく主動詞となるので、先に述べた名詞化を前提とする。たとえば、(6)の文は、動名詞「勉強」が名詞で、英語が所有格「の」と結合して名詞化されている(7)の文と同じように使われる。

(6) まさおが 英語を 勉強する。

(7) まさおが 英語の勉強を する。

こういった動名詞は、意味的には動詞の意味的特性である動作や変化を指す。しかし、第一節で指摘したように、日本語動名詞は特定の項を含むタイプの意味を有するのである。これは、他の普通名詞と区別される重要な点で、むしろ動詞に近いものであることを意味する。したがって、たとえば、「犬」のような普通名詞は項を含むような意味は持たないが、「勉強」は、〈Agent〉と〈Theme〉という項を含むタイプの意味を持っている。以下の表は動名詞の一般的な特徴をまとめたものである。

表3 動名詞の一般的な特徴

	内 容	例
形態素的・統語的特徴	i) 助詞「する」と結合して複合動詞を形成する ii) 名詞化し、目的格「を」をとる	i) 英語を 勉強する ii) 英語の勉強を する
意味的特徴	i) 動作, 変化を指す ii) 特定の項を含む	i) 散歩 〈Agent〉 ii) 勉強 〈Agent, Theme〉

### 3.2 動名詞の種類：その由来

Martin (1973: 869, 872) によると、日本語動名詞はその由来によって三種類にわけることができる。一つは、中国語からきたもので(例：勉強),



これは大半をしめる。二つ目は、もっと最近になって入ってきたものであるが、英語が語源の動名詞である(例: ストライキする)。三つ目は、数は少なめであるが、日本語そのものの中に語源があるもので、「おんぶする」、「だっこする」といった種類のものである(Martin 1973: 872)。

これら三種類の語源の他にも通常の動名詞と同じような特徴をもちあわせた単語や句をつくる語源がある。たとえば、「ごっつんこ」といった例をもつ擬態語である。この「ごっつんこ」は、「ごっつん」というものがぶつかる時の音と「こ」という接尾辞からなっているが、これは形態素的/統語的には助詞「する」と結合して複合動詞を形成することができるし、また「ごっつんこ」が目的語となることもできる。意味的には、ぶつかる動作を指し、一つか二つの項を含む。

もう一つの語源は定式の表現である。日本語にはその社会生活に順応する過程で学習されるいくつかの表現がある。こういった表現は、日常のできごと、生活に直接つながっており、定着しているという点で、儀式的な性格をもつ。たとえば、食事のときの「いただきます」、「ごちそうさま」は、毎日の生活の中で子どもに教えられる。他には、家を出るときには「行ってきます」、帰宅時には「ただいま」、迎える側は「お帰りなさい」といったものがある。これらの表現は、日常的に使われており、日本語の中に定着しているといつてよいだろう。重要な点は、こういった表現は、動名詞と同じような性格をもっていることである。たとえば、「お帰りなさい」は、助詞の「する」と結合して複合動詞を形成することができるし、また主動詞「する」の目的語となることもできる。そして、一つ、または、二つの特定の項を含む。

Martin が示した三種類の動名詞の他にここで紹介したこれらの派生的動名詞の存在は驚くべきことではない。中国語が語源である動名詞(例: 勉強)には、紀元後約3世紀に遡る長い歴史がある(Miyagawa 1987: 31)。中国語の文字のシステムが日本にもたらされたとき、多くの語彙が輸入されたが、その中にはここで動名詞という範疇にある語彙も含まれていた

(Miyagawa 1987: 31)。これらの語彙はもともと中国語では動詞であったが、中国語では語尾が屈折して変化することはなかった。一方、日本語の動詞は、豊富な活用語尾を有していた。したがって、これらの語彙を日本語にとりこむ際、何らかの措置が行われる必要があった。その解決方法とは、助詞である「する」をもととの語彙に結び付けて、複合動詞全体として語尾活用することにし、一方でその意味的な特性を保持する、というものだった。助詞「する」を結び付けることの唯一の目的は動詞化であり、この助詞は、事実上あらゆる適当な単語、句とさえ結合することができる。したがって、この複合動詞化のプロセスは非常に産出力のあるものであると言える。

## 4. データ収集と分析

### 4.1 データ収集

日本語の習得データとして、二人の男児からのデータを使用した。一つ目は、大久保(1981)の幼児の言語資料の中から7ヶ月分(幼児Tの年齢: 13ヶ月~19ヶ月)の発話データをとりだした。この言語資料は毎月約2時間母親と幼児Tとのやりとりをカセットテープに録音したものを書き起こしたものである。もう一つは、徳島に在住する幼児Rとそのまわりの大人(主に母親)とのやりとりを毎月約1時間録音したものを書き起こしたのからとりだした。開始年齢は異なるが、こちらの方も7ヶ月分の発話データ(幼児Rの年齢: 17ヶ月~23ヶ月)を使用した。

### 4.2 分析方法

Pinkerの理論の根幹となっている[統語的範疇と意味的特性の一一対応]の中の〈動作・変化〉という意味的特性が〈動詞〉によって表されているかどうか、この二つが一致しているかどうか絞って、日本語の発話データを分析した。つまり、それぞれのデータにおいて、意味が〈動作・変化〉

を指すとき, どういった単語が使用されているか, その統語的範疇を記録し, 全体としての一致の割合を計算した。この一致の割合の計算方法は以下のとおりである。

$$(8) X(\%) = \frac{\langle \text{動作・変化} \rangle \text{ が } \langle \text{動詞} \rangle \text{ で表された回数}}{\langle \text{動作・変化} \rangle \text{ の回数の合計}} \times 100$$

### 4.3 結果

#### 4.3.1 幼児 T のデータの分析結果

まず, 幼児 T の母親の発話の分析結果から報告する。幼児の母親は, 7ヶ月間中, 動作, 変化を指す場合, そのほとんどを通常の動詞を使って表していたが, 動名詞を使用した場合もあった。しかし, そのすべての場合, 目的格の「を」は使われず, 「する」は常に助詞として使われていた。(9)は彼女が使用した動名詞の中のいくつかである。語尾はさまざまな活用形をとっていたが, 「する」で統一して示す。

#### (9) a. 中国語からきたもの

お掃除する

お昼寝する

お支度する

#### b. 日本語のもの (幼児語を含む)

だっこする

ないないする (=しまう)

ねんねする

#### c. 英語からきたもの

カーブする

ボクシングする

表4は、幼児Tの母親の発話データの中で動作、変化が動詞によって表された数についてまとめたものである。

表4 幼児Tのデータ：母親の発話の中で動作、変化が動詞・動名詞によって表された数

月 齢	13	14	15	16	17	18	19	合計
動詞によって表された数	199	129	358	419	457	410	924	2896
動名詞によって表された数	29	28	132	97	104	148	288	826
動作、変化の数の合計	228	157	490	516	561	558	1212	3722

次に、この表の数字を使って、(8)の計算式により、〈動作・変化〉が〈動詞〉で表された割合を表5にまとめる。

表5 幼児Tのデータ：母親の発話の中で動作、変化が動詞によって表された割合

月齢	13	14	15	16	17	18	19	平均
%	87.2	82.1	73.0	81.2	81.4	73.4	76.2	77.8

次に、幼児Tの発話にもとづく分析結果について報告する。母親の場合とまったく異なり、幼児Tの発話には〈動作・変化＝動詞〉という一致はほとんど見られなかった。すなわち、幼児Tの発話においては、動作は動名詞によって表されていたのである。最初の場合は、幼児語の「ねんね」が助詞「する」なしで使われた。初めて動詞「行く」が使用されたのは19ヶ月のことであったが、これは、「ねんね」を含めてすでに9つの動名詞が使用された後であった。表6(次のページ)は、13ヶ月から19ヶ月にかけて、幼児Tが動作、変化を表現した場合をまとめたものである。実際に現れた動名詞、動詞の形そのまままで示してあり、また、それぞれについての回数も

表6 幼児Tの発話において動作, 変化が動詞/動名詞によって表された場合

月齢	動 名 詞	回数	動 詞	回数	合計
13	ねんね	2		0	2
14	ねんね	7		0	11
	だっこ	2			
	ないない	2			
15	ないない	55		0	61
	ねんね	6			
16	ないない	35		0	40
	ねんね	5			
17	ないない	20		0	20
18	ねんね	32		0	60
	ないない	23			
	だっこ	2			
	ポイ (=捨てる)	1			
	シャンプー	1			
	ジャー (=こぼす)	1			
19	ないない	20	いごいご (=行こ行こ)	2	75
	ねんね	16			
	バイバイ	15			
	だっこ	8			
	ガーガー (=掃除機をかける)	7			
	おんり (=下りる)	4			
	たっち (=立つ)	1			
	ブーン (=捨てる)	1			
	パー (=驚かせる)	1			
	合 計	267		2	269

含めてある。

このように、幼児Tの発話においては、動作、変化は主に動名詞を用いて表されており、「ねんね」、「ないない」といった幼児語が多く見られた。表7は、〈動作・変化〉が〈動詞〉で表された割合をまとめたものである。

表7 幼児Tのデータ：幼児Tの発話の中で動作，変化が普通動詞によって表された割合

月齢	13	14	15	16	17	18	19	平均
%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.6	0.007

## 4.3.2 幼児Rのデータの分析結果

常に母親と二人でのやりとりになっていた幼児Tの場合と異なり，幼児Rの場合，母親に加えて父親，祖母，叔母等の大人とのやりとりも含まれている。まず，幼児Rのそういったインプットの分析結果から報告する。Tの母親と同様，多くの場合動詞が使われていたが，動名詞も7ヶ月間まんべんなく使用されていた。語彙の内容は，Tの母親の場合とほとんど同じで，動名詞においては重なるものが多く見られた。たとえば，次の表はRが22ヶ月のデータの中にあつた幼児語動名詞をまとめたものである。

表8 幼児Rのデータ：22ヶ月時のインプットにおける幼児語動名詞の使用

	種 類	回数
幼児語動名詞	ないないする	27
	ねんねする	16
	たっちする (=立つ)	10
	だっこする	7
	とんする (=落ちる, 下りる)	3
	きれいきれいする (=掃除する)	1
合 計		64

このように幼児Rのインプットにおいても幼児語の動名詞が多く使用されており，あらためて動名詞の産出性の高さが伺える。表9 (次のページ) は，インプットの中で動作，変化が動詞・動名詞によって表された数を示す。

表9 幼児Rのデータ: インプットの中で動作, 変化が普通動詞・動名詞によって表された数

月 齢	17	18	19	20	21	22	23	合計
普通動詞によって表された数	257	95	103	106	78	224	312	1175
動名詞によって表された数	173	62	43	49	32	131	50	540
動作, 変化の数の合計	430	157	146	155	110	355	362	1715

さらに, このデータを「統語的範疇と意味的特性の一対一対応」という観点から, (8)の式にしたがってその対応の割合を計算した。

表10 幼児Rのデータ: インプットの中で動作, 変化が動詞によって表された割合

月 齢	17	18	19	20	21	22	23	平均
%	59.7	60.5	70.5	68.3	70.9	63.0	86.1	68.4

幼児Tのインプットの場合にくらべると, 一致の割合が多少下がっているが, 大半は動詞が使用されていた。

次に幼児Rの発話における分析結果について報告する。Rの動作, 変化に対する表現は18ヶ月まで出現しなかった。18ヶ月から21ヶ月までRは, 助詞の「する」をつけないままの動名詞を使って動作, 変化を表現した。22ヶ月になって初めて主動詞である「する」を使用した。しかし, 23ヶ月には, むしろ動詞を多く使用していた。表11(次のページ)は, 幼児Rの発話において動作, 変化が動詞/動名詞によって表されたものをまとめたものである。

この表を見ると, 確かに早い時期には動名詞が広く使用されているが, 22, 23ヶ月時では, 少ない種類ではあるが, 動詞が多く使用されているのがわかる。

表11 幼児 R の発話において動作, 変化が動詞/動名詞によって表された場合

月齢	動名詞	回数	動 詞	回数	合計
17		0		0	0
18	いたいた	1			1
19		0		0	0
20	ないない (=しまう)	4		0	6
	ねんね	2			
21	ねんね	4		0	10
	ないない	3			
	ぱっぱ (=おんぶ)	3			
22	ねんね	8	して	1	9
23	めえって (=叱る)	2	行く	12	18
	おかわり	1	開けた	2	
	かっちゃん (=壊す)	1			
	合 計	29		15	44

しかしながら, 興味深いことに, この1ヶ月前, つまり21ヶ月の段階からすでに動名詞を含む二語の発話がいくつか見られた。しかも, そのもう一つの単語は, 動名詞の項にあたるものである。以下にその例を示す。

(10) 21ヶ月

a. びんび (魚) ないない

&lt;Theme&gt;

b. これ ねんね

&lt;Agent&gt;

22ヶ月

a. かあちゃん ねんね?

&lt;Agent&gt;

表12は, 幼児 R の中で動作, 変化が動詞によって表された割合をまとめたものである。



表12 幼児Rのデータ: 幼児Rの発話の中で動作, 変化が動詞によって表された割合

月齢	17	18	19	20	21	22	23	平均
%	N/A	0.0	N/A	0.0	0.0	11.1	77.7	34.0

これらの結果をもとに、〈動作・変化〉が〈動詞〉で表された割合をそれぞれのデータ間で比較するため、合わせてグラフにした。このグラフからわかるように、インプットについては、幼児TについてもRについても一致の割合は常に安定して存在しているが、幼児の発話については、早い時期から存在する訳ではなく、むしろ、少なくとも初期の段階の数ヶ月間は存在しないことがわかる。

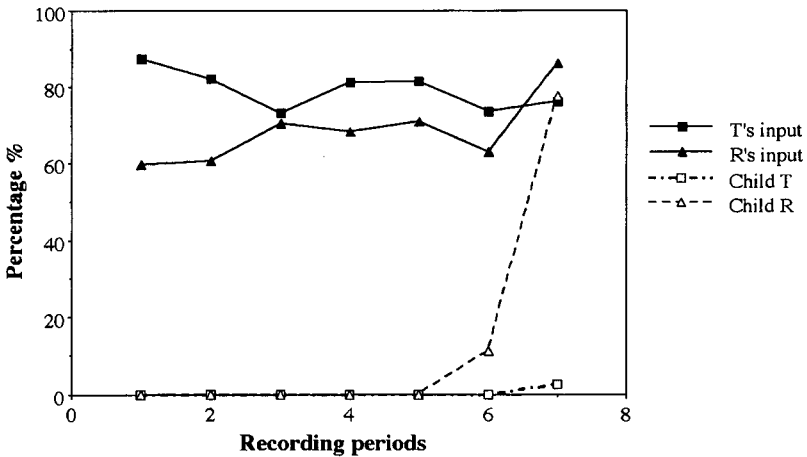


図1 幼児Tの発話, 幼児Rの発話, 幼児Tのインプット, 幼児Rのインプットにおいて〈動作・変化〉が〈動詞〉で表された割合<sup>2)</sup>

## 5. 考 察

インプットについては、幼児Tのデータも幼児RのデータもともにPinker (1984) が英語の習得データをもとに示した肯定的証拠 (2.2. 参照) とほぼ一致した結果となった。つまり、Tの母親は平均で77.8%, Rのまわりの大人は68.4%の割合で動作, 変化を動詞で表していた。Pinkerの英語のデータの場合, 88%であった。

このようにPinkerの報告にくらべて, この研究で得られた数字が低くなったのは, おそらく日本語に特有の動名詞の存在が考えられる。なぜなら, この一致から外れた場合はすべて動名詞によって表されていたからである。それにもかかわらず, 大半は動詞が使用されており, したがって, 本研究におけるインプットの分析結果は, Pinkerの理論を支持するものである。

一方, 幼児の発話の分析結果は, まったく異なるものであり, 目を見張るものがあった。Rは, 平均34%の割合で動詞を使用し, Tはその割合が1%にも満たなかった。残りの場合はすべて動名詞が使用されていた。これらの結果は, 初期段階の子どもの発話においてはすべての場合動詞が使用されたとするPinkerの報告と大きく異なる。したがって, 本研究での幼児の発話の分析結果は意味的自助仮説を弱めるものとなった。

しかしながら, ここで結論をだす前に, 二人の幼児の言語発達段階においてこれらの動名詞が果たして名詞として判別されているのか, あるいは, 動詞として判別されているのか, もう少し詳しくデータをみていく必要がある。幼児の発話では, 動作, 変化を表すとき, ほとんどの場合動詞ではなく動名詞が使われていた。しかし, そうはいても, データは習得の初期段階であり, 格マーキングも動詞の活用もまだ現れておらず, これらの動名詞が名詞であるという明らかな証拠はない。Rの場合, 21ヶ月で動名詞が項である他の名詞とともに使用されていた ((10)参照) が, これも, 助詞「する」

の存在なくては、やはり証拠とはならない。

しかし、これらの動名詞と普通名詞の発達の様子をくらべることにより、これらの動名詞の統語的地位をさぐることができるかもしれない。

Rの場合、18ヶ月ぐらいから動名詞を産出しはじめたが、この頃までにすでに4つの普通名詞（これ、ブーブー=車、パパ、ボール）を産出している。彼の名詞群はその後順調に増え続け、22ヶ月で語彙数が50語に達したときの普通名詞の数は40であった。この間、動名詞の種類は4つにとどまった。

Tの場合、13ヶ月の時点では、4つの名詞を産出していた（うまうま=食べ物、たあちゃん=幼児自身の名前、ぶうさん=ぶた、ブーブー=車）一方で、ただ一つの動名詞（ねんね）を産出していた。彼の普通名詞群の数は増え続け、50語に達した19ヶ月頃には31の人やものの名前が産出された。この間、動名詞の数も12まで増えた。

したがって、Rのデータにおいては、いくつかの普通名詞は動名詞の出現の前に現れたが、Tのデータにおいては動名詞と名詞はほぼ同じ時期に出現したと言える。しかし、どちらの場合も普通名詞の方が動名詞よりその語彙の増加速度はまさっていた。これらのことを整理すると、動詞が幼児のカテゴリーとして出現する前に、普通名詞と同じくして動名詞もカテゴリーとして出現したことになる。

Pinkerの意味的自助仮説によると、子どもは人やものを指すものは名詞と判別する。子どもの初期段階の語彙には人やものの名前を指す名詞が多いことから、生得的な範疇判別のメカニズムは、名詞というカテゴリーについては、すでに機能していたと言えるであろう。

ちょうど同じ頃、数は少ないけれども動名詞は、動作、変化を表す単語として産出された。意味的自助部分はこの動名詞を意味的特性（=動作、変化）から動詞に分類せよと命令するにもかかわらず、屈折部分をもとにした分布の学習はその形態素的、統語的特性（例：副助詞「は」と共起し得る）

から名詞に分類せよと命令する。この理論では、子どもは、最終的には分布の学習部分を優先するので、これらの動名詞は名詞として判別されるかもしれない。

Pinker の理論が正しいとして、意味的自助理論が動名詞を名詞として判別できるよう導いているとするなら、この理論の論理を最後までたどり、本研究のデータと摺り合わせて調べる必要がある。このような仮説をたてることは健全な言語の習得の観点から見ると望ましくないかもしれないが、この手法は、Pinker の理論を検証するには適当であるように思われる。

この理論によると、動名詞が名詞として正しく判別されるためには、分布による学習が意味的自助部分より優先されなければならない。もし、仮に意味的自助部分が最初にまちがって動詞という判別をしたとし、分布による学習がそれを正しく直すためには少し時間がかかるであろう。というのは、分布による学習機能は、どの活用語尾がどの範疇と一致するかという機能を最初から備えていないからである。しかも、もし意味的自助部分が先に動名詞の意味的特性から動詞であると判別してしまったら、それと共に起る活用語尾が果たして動詞のものなのか名詞のものなのかわからなくなってしまう。

人やものの名前といった名詞の典型的な意味をもつ単語と動作、変化といった動詞の典型的な意味をもつ動名詞が、ほぼ同じ時期に現れるので、普通名詞と共に起る語尾と動名詞と共に起る語尾(例:「は」)は、動詞から名詞を区別する屈折語尾としてまだ判断されていない可能性は高い。

この論理の路線をたどっていくと、二つのシナリオが考えられる。一つは、仮に意味的自助部分が動名詞を動詞と判別したとしよう。そうすると、それと共に起る活用語尾、たとえば副助詞「は」を動詞の活用語尾だと判断し、この副助詞と共に起る名詞を他の動詞と動名詞とともに動詞として分類してしまう。また、一方で、あとになって学習する本来は動詞の活用語尾、(例:過去形)を普通名詞と動名詞とともに使用してしまう、といったことが起こりかねない。

逆に、何らかの理由で、分布情報の方が優先され、動名詞が正しく名詞として判別されたとしよう。そうなったときは、動詞と共起する活用語尾がまちがって動名詞と結合されてしまうという誤りがでてくるはずである。というのも、動名詞の意味的特性は動作、変化といった動詞の典型的な意味を指すものばかりであり、分布による学習は意味的自助機能より少し遅れてはじまると考えられるからである。そうすると、動名詞と意味的特徴をシェアする動詞は、動名詞と共起する活用語尾（例：副助詞「は」）とまちがって結合されてしまうかもしれない。これを正しく直すのは、もっとあとになってからの分布による学習が確立されたときだからである。

表13（次のページ）は、意味的自助機能による普通名詞、動名詞、動詞の判別（＝ステージ1）、分布による学習（＝ステージ2）、考えられるまちがった判別状態（＝ステージ3）を示したものである。

表12で予測された誤りについて、Tの後段階（20ヶ月～36ヶ月）の発話を調べた結果、これらの予測された誤りは見つからなかった。上の表の例のような、動名詞の誤った語尾活用が起らないことは、分布による学習が優先され、その意味的特徴にかかわらず、名詞として判別されていることを意味する。

したがって、幼児の発話の中に〔統語的範疇と意味的特性の一一一対応〕が見られなかったことと、理論上予測される活用語尾の誤りがなかったことは、意味的自助機能を基盤とする Pinker の意味的自助理論に対して疑問を投げかける結果となった。

## 6. 結 び

本研究では、日本語の動名詞に着目し、Pinker (1984) が統語的範疇の判別理論として提唱している意味的自助仮説について検証をおこなった。英語の習得データで見られたような〔統語的範疇と意味的特性の一一一対応〕は、

表13 普通名詞, 動名詞, 動詞の判別と誤りの可能性

	普通名詞	動名詞	動詞
〈ステージ1〉 意味的自助機能	ブーブー =ものの名前 ものの名前=名詞 ∴ブーブー=名詞	ねんね =動作 動作=動詞 ∴ねんね=動詞	食べる =動作 動作=動詞 ∴食べる=動詞
〈ステージ2〉 分布による学習	ブーブーは? ↓ 名詞の特徴?	ねんねは? ↓ 動詞の特徴?	
〈ステージ3〉 共起の部分から 誤りの可能性 (後段階)	*ブーブーる *ブーブーた *ブーブーて *ブーブーない	〈シナリオ1: 動詞から出発〉 ねんね=動詞 ねんねは? *ねんねる *ねんねた ねんねて *ねんねない	*食べるは? 食べる 食べた 食べて 食べない
(後段階)		〈シナリオ2: 名詞から出発〉 ねんね=名詞 ねんねは? *ねんねる *ねんねた *ねんねて *ねんねない ねんねは?	*食べるは? 食べる 食べた 食べて 食べない *食べは?

インプットにおいては確認できたが、子どもの初期段階の発話においてはまったく確認できなかった。データの詳しい分析の結果、やはり原因は、動名詞の存在である。日本語動名詞は、形態素的・統語的には名詞であるが、意味的には、動作、変化といった動詞の特性をもっているため、これらの動名

詞がどのように現れるかはこの理論にとって非常に重要であった。幼児の発話の中で早い時期から数多く現れた動名詞は、普通名詞と同じ時期に出現し、また一方で、動詞が遅れて出現することから、この理論の根幹部分である意味的自助機能の仮説を弱める結果となった。さらに、理論上予測された活用語尾の誤りがなかったことも Pinker の理論に反駁する材料となった。

動名詞の形成過程はオールマイティで非常に産出性が高く、形態素的・統語的に特徴的な構造をもっている。Pinker の理論を検証することにより、日本語動名詞の獲得上の問題点が明らかになったのである。さらにデータを集め、統語的な観点から詳しく調べていくことが待たれる。

## 注

- 注 1) この論文は、1993年にアメリカで出版された著者の論文と博士論文の一部をもとに新たな分析が付け加えられ、日本語で書き直されたものである。
- 注 2) 横軸の数字は、それぞれの幼児のデータの録音月の最初の月を 1 として示してある。

## 引用文献

- Brown, Roger. 1973. *A first language: The early stages*. Cambridge: Harvard University Press.
- Grimshaw, Jane. 1981. Form, function, and the language acquisition device. In C. L. Baker and J. J. McCarthy, eds., *The logical problem of language acquisition*. Cambridge: MIT press.
- Macnamara, John. 1982. *Names for things: A study of child language*. Cambridge: Bradford Books: MIT Press.
- Martin, Samuel. 1973. *A reference grammar of Japanese*. New Haven and London: Yale University Press.
- Miyagawa, Shigeru. 1987. Lexical categories in Japanese. *Lingua* 73, pp. 29-51.
- O'Grady, William. 1995. *Syntactic development*. Chicago University Press.
- Okubo, Ai. 1982. *Yooji no kotoba shiryoo*. Tokyo: Kokuritsu kokugo kenkyuujo.
- Pinker, Steven. 1984. *Language learnability and language development*. Cambridge: Harvard University Press.
- Rondal, Jean & A. Cession. 1990. Input evidence regarding the semantic bootstrapping hypothesis. *Journal of Child Language* 17, pp. 11-17.

- Slobin, I. Dan. 1973. Cognitive prerequisites for the development of grammar. In C. Ferguson & D. I. Slobin, eds., *Studies of child language development*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Yamashita, Yoshie. 1993. Indirect evidence regarding the semantic bootstrapping hypothesis: Data from Japanese. In Nevis, J. A., G. McMnamin, & G. Thurgood, eds., *Papers in honor of Frederick H. Bregelman*. California State University, Fresno. pp. 151-163.
- . 1995. The emergence of syntactic categories: Evidence from the acquisition of Japanese. PhD dissertation. University of Hawai'i at Manoa.

(やました・よしえ 経営学部助教授)